

高木仁三郎市民科学基金 助成研究/研修 完了報告書

提出日：2006年4月26日

1. 氏名・グループ名及び研究テーマ

氏名(グループ名)	長島の自然を守る会
連絡先・所属など	山口県防府市仁井令町20-11-B201 midori.t@crocus.ocn.ne.jp
調査研究・研修のテーマ	上関原発計画予定地の自然環境・生態系調査及び詳細調査が環境に与えるダメージの科学的検証
研修先の機関・名称など <研修の該当者のみ>	

2. 調査研究・研修の経過

1. 生態系調査

日時	名称	内容	招聘した研究者名等	一般参加者数
'05.4.3.	● 4月調査	● 海水汚濁度 ● 樹木札賭け	● 湯浅一郎	● 8名
'05.4.13.	● 神社地視察	● 弁護士との共同視察		● 8名
'05.5.4.~5	● 春季自然の学校 (No.1)	● 潮下帯 (ナメクジウオ etc.) ● 潮間帯 (ミミズハゼ・カサシャ ミセン etc.) ● 鳥類	● 向井宏 ● 秋山貞 ● 加藤真 ● 野間直彦	● 23名
'05.5.25.~ 26	● 春季自然の学校 (No.2)	● 潮間帯 ● 潮下帯 ● 海藻 ● 鳥類	● 山下博由 ● 横浜康嗣	● 13名
'05.6.26.	● キノコ観察会	● キノコ	● 山田詳生	● 8名
'05.7.24.~ 25.	● 夏季調査	● ゴカイ ● 海水汚濁度 ● ほ乳類 ● 植物 ● 鳥類	● 佐藤正典 ● 金井塚務 ● 湯浅一郎 ● 山下博由	● 7名
'05.8.27.	● ベントス学会視察	● 生態系	● 岩崎敬二	● 6名
'05.9.4.	● 陸域ボーリング ● 潮間帯	● 潮間帯砂泥 ● 植物伐採状況		● 8名
'05.10.8.	● キノコ教室(No.2)	● キノコ	● 山田詳生	● 8名
'05.10.15~ 16	● 秋季自然の学校 (No.1)	● 潮下帯 ● 植物 ● 潮間帯 ● 鳥類	● 向井宏 ● 加藤真 ● 野間直彦 ● 安溪遊地 ● 安溪貴子	● 16名

' 05.11.26.	● 秋季自然の学校 (No.2)	● 鳥類 ● 植物	●	● 10名
' 05.12.25.	● 冬季自然の学校	● 鳥類 ● 植物 ● 魚類 ● 海水汚濁度	● 梶畑哲治 ● 清水則雄 ● 湯浅一郎 ● 安溪遊地 ● 安溪貴子	● 15名
' 05.12.28 ~ 29	● 冬季調査(No.1)	● 鳥類		● 4名
' 06.1.29~30	● 冬季調査(No.2)	● 鳥類 ● 植物		●
' 06.2.14~15	● 冬季調査(No.3)	● 鳥類	●	● 4名
' 06.2.25~26	● 冬季調査(No.4)	● 鳥類 ● 植物 ● 海藻	●	● 7名
' 06.3.11. ~ 12	● 湧水調査 ● 植物調査	● 湧水 ● 植物 ● 鳥類	● 菊池亜希良 ● 安溪遊地 ● 安溪貴子	● 8名
' 06.3.19~20	● 春季調査(No.1)	● 鳥類 ● 海生生物	●	● 5名
' 06.3.23	● 春季調査(No.2)	● 鳥類 ● 海生生物	●	● 3名
' 06.3.25	● スナメリ調査	● スナメリ ● 鳥類	● 粕谷俊雄	● 17名
' 06.3.30.	● 春季調査(No.3)	● スナメリ ● 鳥類 ● 海生生物	●	● 5名

2. イベント

日時	名称	内容	招聘した研究者名等	一般参加者数
' 05.5.29.	● スナメリウォッチング&ピワ狩りツアー	● スナメリウォッチング ● 祝島へのピワ狩り&交流		● 15名
' 05.11.27	● シンポジウム	● 詳細調査のダメージ告発	● 向井宏 ● 横浜康嗣 ● 加藤真 ● 中根周歩 ● 湯浅一郎 ● 金井塚務 ● 佐藤正典 ● 西濱士郎 ● 山下博由	● 55名
' 05.12.25	● ハゼの実採集	● ロウソク作りの原料採集	●	● 15名
' 06.3.26.	● スナメリウォッチング	● スナメリ講座 ● スナメリウォッチング	● 粕谷俊雄	● 17名

3. 調査研究・研修の成果

1. 詳細調査のダメージの検証

- 2005年度は、詳細調査の開始という、私たちにとっては、まことに残念な展開の中で、これまでの活動と質的に大きな変化があった。従来は、長島の生態系の貴重さを前面に出し、その保全要求の中で原発計画にストップをかけることに精力を集中してきた。今回は、詳細調査によるダメージの検証という作業である。
- 2005年4月13日に陸域ボーリング、6月25日に海域ボーリング調査が開始され、7月には早くも南部海岸で汚泥の堆積、8~9月にはカサシャミセンやカメノテ・ケガキの死殻の急増を確認した。10月には、潜水調査により、海藻への浮泥堆積や砂質変化を確認した。
- これらの環境変化の原因追及の過程で、2005年9月9日、事業者が6ヶ月にわたり、陸域ボーリング濁水を垂れ流していた事実を告発した。
- また、2005年10月15日には、海域ボーリングでの漏水防止コンクリートのひび割れを摘発した。
- これらの事実を以って、中国電力・山口県・環境省・資源エネルギー庁などに申し入れ、責任追及をした。
- その結果、陸域ボーリングについては、2ヶ月半、工事を中断させ、海域ボーリングについても、事業者が海中監視カメラを設置せざるをえない結果となり、'06年1月29日の漏水発表の引き金になったと言える。
- また、海藻への浮泥堆積やカサシャミセン・カメノテ・ケガキの死殻急増など、私たちが指摘している海岸部の異変について、現段階で事業者も県も事実を認めていないが、事業者は独自調査を開始した。
- 今後、科学的な調査結果の応酬の中でのたたかいとなる。

2. 希少生物の新たな確認による保全追及

- 一方で国の天然記念物であるカラスバトの鳴き声を会員が確認し、事業者に追加調査を余儀なくさせ、現在、カラスバトの通年調査を行っている。
- また、ミミズハゼや瀬戸内海で2箇所目の確認である海藻のスギモク確認など、これから事業者や行政に新たな保全要求をするデータも得られた。
- 事業者が毎年、調査を実施しているヤシマイシン近似種についても、'06年4~5月調査で卵塊の増加を確認し、田ノ浦が安定した繁殖地であることが証明された。

3. 共有地裁判や神社地裁判での入り会い実態証明

- 一番の山口地裁岩国支部で入会権が認められた炉心部分を含む四代地区共有地につき、広島高裁で第2審が争われた。
- 中電側は、「入り会いの実態がなかった。」ことを証言や愛媛大学の江崎教授の報告によって立証しようとした。
- 弁護団と生態学会の野間直彦さん、安溪遊地さんの指導のもと、会員が参加して行った植生調査の結果が全面的に認められ、「入り会い実態はあった。」とされた。
- しかし、利用しなくなって30年以上経過したものについては、地役権が時効消滅するという、これまで前例のない理由で裁判は敗訴し、現在、最高裁に上告している。
- 一方、神社地裁判でも、共有地裁判での入り会い実態証明という部分的勝利を踏まえ、氏子の入会権=所有権という主張をより一層、堅固なものにするため、植生調査を実施中である。

4. スナメリツアーの定着や里山利用の試行

- 一方、長島の自然に親しんでもらうためのスナメリツアーが定着し、毎回20~30人の参加者が訪れる。特に、会員以外の人たちが多く、運動のすそ野を拓げる大きな力になっている。
- また、里山利用の試行として、ハゼの実を採集し、ロウソク作りの再生に着手した。

5. ビデオ「瀬戸内の原風景 長島~長島の自然を守る~」やパネル写真の完成

- 1999年の会結成から、7年間で蓄積された調査の成果を、漸くビデオ「瀬戸内の原風景 長島~長島の自然を守る~」に集大成することができた。

‘06年6月25日広島を皮切りに、山口県内はもとより、愛媛・東京・神戸など全国で上映する計画である。上関原発問題と長島の自然環境・生態系の貴重さを広くアピールする手段として活用したい。

6. 地元反対運動との連携

- 地元祝島を中心とする反対運動は漁船や陸上封鎖などの実力阻止行動などが中心となるが、体力的・財政的な制約の中で、短期決戦とならざるを得ない。私たちの運動が、側面からの援護として、一翼を担いつつある。

4. 対外的な発表実績

1. 申し入れ

月 日	申し入れ先	内 容	回 答
‘05.2.3..	● 山口県 ● 中国電力	● 詳細調査の全面中止 ● 詳細調査全面中止を求める署名提出	● 環境保全計画を提出
‘06.6.20.	● 山口県	● 詳細調査中止 ● ヤシマイシン近似種調査不備追及	● ヤシマイシン近似種調査不備は事業者に伝える
‘05.9.15.	● 山口県 ● 中国電力	● 陸域ボーリング漏水摘発 ● 田ノ浦海岸部異変追及	● 陸域ボーリング漏水認め、調査中止を指示 ● 海岸部異変は認めず
‘05.11.16.	● 環境省 ● 資源エネルギー庁 ● 文化省	● 環境保全計画総点検報告書の重大な欠陥について ● カラスバトの調査&保護要望 ● 詳細調査による生態系へのダメージ検証 ● 詳細調査許認可取り消しと全面中止	● 海域ボーリング漏水認めず ● カラスバト調査を指示 ● 許認可取り消しはしない

2. 学会発表等

月 日	発表機関名	内 容
‘05.10.10.	エントロピー学会	上関原発予定地長島の自然と生活を守る
‘06. 1.12.	山口県立大学	上関原発予定地の自然環境と生態系

3. 寄稿原稿

月	掲載誌名	表 題
‘05. 5.	反原発新聞	詳細調査の強行とダメージ
‘05. 5.	環瀬戸トラストニュース	詳細調査の強行とダメージ
‘05. 7.	むすぶ	詳細調査の強行とダメージ
‘05. 7.	自然と人間	詳細調査の強行とダメージ
‘05.10.	中国五県反原発共闘	陸域ボーリング漏水告発
‘05.10.	活憲	陸域ボーリング漏水告発
‘05.12.	パトローネ	陸域ボーリング漏水告発

5. 今後の展望

1. 詳細調査のダメージ検証により、中止に追い込む

これまでの調査実績を踏まえ、環境保全やボーリング漏水告発など、詳細調査を一定程度、遅延させることはできた。事業者は、今年度中に詳細調査を終わらせたいとしているが、現段階では、大幅な遅れが出ている。そのため、8月に大型ボーリング機械を再投入するという情報もあり予断を許さない。調査の頻度を高め、ダメージの検証に全力を投入し、調査中止に追い込むことにより、原発計画自体を中止させる。

2. 里山利用の再生

四代地区共有地裁判で示された「30年以上利用実態がない。」という判例への反証として、ハゼの実採集によるロウソク作りの復活や、金漆の再生など里山利用の再生を手がけ、地域振興の一環にする。

3. 植生調査による入会実態の検証

上関原発計画の動向に大きな影響を与える炉心部分の四代地区共有地訴訟や神社地訴訟で、植生調査により、入会実態を検証し、勝訴に導く。また、他の訴訟においても、必要な情報を提供する。

4. アセスメントのやり直し要求

長島は上関原発予定地に含まれ、環境影響調査は旧アセス法に基付いて行われた。多数の研究者が希少生物の存在や豊かな生態系を確認し、問題点を指摘したが、科学的根拠も明確にせず、確定された。調査の成果を背景に、事業者・行政にアセスメントのやり直しを迫る。要求が受け入れられない場合、生態学会中国四国地区会などと共に「市民アセスメント」を行い、専門誌に発表する。同時に、現行アセス法による事業者アセスの限界を追求し、第3者機関によるアセスメントを要求する。

5. 山口県レッド・データ・ブック海産生物版の編集要求

山口県レッド・データ・ブックの汽水域貝類が当初の編集方針を変え、対象から外され、長島の希少貝類も登載されなかった。調査成果を基に海産生物版の早期発行を要求し、要求が受け入れられない場合、生態学会中国四国地区会などと共に、独自のレッド・データ・ブック作成をする。このことにより、希少海生生物を絶滅の危機から救う手立てを少しでも早く講じるとともに、山口県R.D.B.海産生物版作成への具体的情報提供をする。

6. 世論への普及

長島の自然環境・生態系を保護するには、上関原発計画を中止させることが必須であり、そのためには、幅広い世論の高まりが必要である。今年は特に、全国縦断パネル展&シンポジウム開催に力を入れ、詳細調査中止の原動力とする。また、自然の教室の開催・ビデオやガイドブックの活用・エコツアーの受け入れなどの手段を通じ、成果を広く一般市民・研究者に普及させ、自然保護と上関原発計画中止を運動の両輪として広げる。

7. 原発に頼らない町作りへの展望

上記8のような日常活動の実践により、原発に頼らず、自然と共生する町作りの具体化の中で、上関町が直面している過疎問題解決の具体的展望が見えるようにする。

8. 上記1～9を通じ、長島の自然環境・生態系の科学的価値を立証し、上関原発建設計画を中止させ、瀬戸内海におけるサンクチュアリとして特別保護区指定や世界遺産登録を実現する。

高木基金へのご意見

これまで計3回の助成を受け、会としての活動の根幹にかかわる調査・研究費用の大半を支えて頂いた。

その成果として、長島の生態系の貴重さを科学的に検証してきた。そのことが、詳細調査の開始に当たり、事業者環境保全計画策定を余儀なくさせ、詳細調査におけるボーリング漏水告発と調査中断という具体的な抑止力としてさせることができた。

2005～2006年度は詳細調査との攻防の中で、調査頻度・範囲を高めたため、財政的に逼迫し、現在、調査活動資金が底をついている。会員の拡大や物資販売による財源確保をし、資金面での自立を目指さなければならないが、なかなか、思うに任せない現状である。

高木基金の援助を今しばらく、願うものである。